2012年

Fukuoka Asian Art Museum Information

福岡アジア美術館インフォメーション スケジュールは変更することがありますので、事前

January

アジアギャラリー A Asia Gallery A (Permanent Collection)

7F

7F

7F

アジアギャラリー B Asia Gallery B (Permanent Collection)

企画ギャラリー A・B・C

Exhibition Gallery A.B.(

交流ギャラリー

8F

あじびホール AJIBI Hall

8F

福岡アジア美術館 (リバレインセンタービル) Fukuoka Asian Art Museum

(Riverain Center Bldg. 7-8F)

西鉄大牟田線

市営地下鉄 City Subway

都市高速1号線 Express Way No.1

5 日服町ラ

キラキラ☆チカチカ─光のアート 1/2(月)—4/3(火)



ポン・ホンヂィ/彭弘智(台湾) 「1匹のラッシー」2000年 Peng Hung-Chih (Taiwan) "One Lassie" 2000

南アジアの現代美術ーネットワークから世界へ

12/15(木)-3/27(火)

モハマッド・マハブブ・ラーマン(バングラデシュ) 「停るロト(ヒンドゥー神話の船)」1991年 Md. Mahbubur Rahman (Bangladesh)

March

1/2(月)-1/10(火)

Collecting India: Fascination with Indian Visual Culture in Contemporary Japan

第17回福岡県幼児画展

1/7(土)-1/9(月)

合同文化発表会

第10回福岡市立高等学校

1/12 (木) —1/17 (火)

1/19 (木) —1/24 (火) Hakata-ku Culture and Arts Exhibition 201

1/26 (木) —1/31 (火) 19th Soryukai Calligraphy Exhibition

第19回蒼龍会書作展

10th Fukuoka City Joint High Schools Cultural Exhibition

作者不詳「牛の中の神々」19世紀後半 遠藤健一コレクション Artist Unknown "Gods in Cow" late 19th Century Endo Kenichi Collection

2/2 (木) -2/7 (火)

Ken De Works 2011卒展

第52回福岡大学美術部展 2/9 (木) -2/14 (火)

愛まごころ写真展 2/16 (木) -2/21 (火)

2/23 (木) -2/28 (火)

2011アジアデジタルアート大賞展 3/17(土)―3/27(火) 2011 Asia Digital Art Award

花と光のフェスティバル 「押花で描く雅の世界」作品展 「グラスアート・ネイチャープリント・ レカンフラワー」作品展 3/29(木) — 4/3 (火) Flowers and Light Festival Exhibition.

Flowers and Light Festival Exhibition, 'Pressed Flowers: A World of Representation Exhibition of Glass Art, Nature Prints and L'ecrin Flowers

川原秀人油彩展 3/29(木)—4/3(火) vahara Hideto Oil Painting Exhibition

福岡教育大学大学院 美術教育コース修了制作展

3/1 (木) -3/6 (火) Graduation Exhibition: Art Education Course, Education Studies Department, Fukuoka Education University Postgraduate School

九州女子大学書道専修コース卒業書作展 3/8 (木) -3/13 (火)

阿部財団 彩友会 3/15 (木) -3/20 (火)

クリスタラインペインティング生徒展 3/22 (木) —3/27 (火)
Crystalline Painting Student Exhibition

「AnotherWorld/別世界」 福田竜也写真展+ BPPウエディングフォトコレクション 3/29 (木) -4/3 (火)

'Another World': Photography
by Fukuda Tatsuya and BPP Wedding Collection

大島しぜんとプロジェクト

1/20 (金) -1/22 (日) 18:00~

千代県庁口

博多駅

Hakata Sta

中洲川端駅 下車、6番出口より徒歩すぐ 福岡空港 駅より9分 博多 駅より3分

川端町・博多座前 バス停下車、徒歩すぐ

博多座・福岡アジア美術館前 バス停下車、徒歩すぐ(ぐりーんバス)

②太宰府方面から都市高速 千代 ランプより車で約7分 ○北九州方面から都市高速 呉服町 ランプより車で約5分

※昭和通りより、博多リバレイン地下の駐車場(有料)をご利用ください 午前10時~午後8時まで

入場は午後7時30分まで) 毎週水曜日(水曜日が休日の場合はその翌平日) 年末・年始(12月26日から1月1日)

*Enter Hakata Riverain Bldg underground parking from Showa-dori Open 10:00-20:00 (Last admission 19:30)

•From Tenjin Station (from Nishitetsu Fukuoka Station): 1 minute

Hakataza / Fukuoka Asia Bijutsukan-mae bus stop (Green Bus)

Alight at Nakasu-Kawabata Station and take Exit6

From Fukuoka Airport: 9 minutes

From JR Hakata Station: 3 minutes

Kawabata-machi / Hakataza-mae bus stop

/ednesdays the following day if Wednesday is a national holiday) New Year's Holidays (26 December-1 January)

From Dazaifu: 7 minites from Chiyo Ramp, Urban Expressway
 From Kitakyushu: 5 minites from Gofukumachi Ramp, Urban Expresswa

西鉄福岡(天神)駅 Nishitetsu Fukuoka Stat

〒812-0027 福岡市博多区下川端町3-1 リバレインセンタービル7・8階 TEL 092-263-1100

Fukuoka Asian Art Museum 7F-8F Riverain Center Bldg., 3-1 Shimokawabata-machi, Hakata-ku, Fukuoka, 812-0027 Japan URL: http://faam.city.fukuoka.lg.jp/



魅せられて、インド。 日本のアーティスト/コレクターの眼

Collecting India: Fascination with Indian Visual Culture in Contemporary Japan

1月21日(土)~3月11日(日) 企画ギャラリー

Sat 21 January - Sun 11 March Exhibition Gallery

アーティストが見たインド India as seen by artists

"インドにすっかり魅了されてしまった!" そんな日本のアーティストの作品と個 人コレクターの秘蔵インドコレクショ ンを公開します。「混沌のインド」か ら、いったいどんな一面を見出したの でしょう?その眼力に迫ります。

Enthralled with India: such are the artists whose works are featured, and the collectors whose archive pieces are shown at this exhibition. Here, we examine the artistic face of the seeming chaos of India.



インドを旅し、インドの視覚文化の影響を強く受けた日本の画家、 グラフィックデザイナー、写真家など様々なジャンルのアーティストに よる作品を紹介します。また、アーティスト自身が集めたインドの絵画 や彫刻などのコレクションも合わせて展示することで、どのようにイン ドを理解し、自分の表現に結びつけているのかを探ります。

In this part of the exhibition, we feature the work of Japanese painters, graphic designers, photographers and other creative individuals who have journeyed through India and been profoundly influenced by its visual culture. Also on display are Indian art works and sculptures collected by these artists, giving much insight into their appreciation of India.



横尾忠則「Y+T」1991年 Yokoo Tadanori "Y+T" 1991

1990年、インドの西部アーメダバード の富豪宅に招かれた横尾さんが、インド の映画看板描きとコラボンた作品じゃる。





1930年にガンジーがイギリスの植民地支配 に抗議しておこなったのが「塩の行進」なんじゃ。 後ろに続く人々の歩く姿に注目を。

> ○一般800円 高大生500円 中学生以下無料 OAdult ¥800 College & High School ¥500 *Free for Secondary school and under

●出品アーティスト

横山大観(日本画家)、オボニンドラナト・タクル(画家)

秋野不矩(日本画家)、平山郁夫(日本画家)、沖守弘(写真家)、妹尾河童(舞台美術家)、 杉浦康平(グラフィックデザイナー)、横尾忠則(美術作家)、藤原新也(写真家)、

相原信洋(アニメーション作家)、畠中光享(日本画家)、西岡直樹(作家)・西岡由利子 (テンペラ画家・染織家)、蔵前仁一(編集者、グラフックデザイナー)、グレゴリ青山(漫画家)

会期中のイベント

講演会:妹尾河童

「『河童が覗いたインド』を語る」 日時:2月11日(土) 午後2時~3時半

参加料: 500円 申込期間:1月21日(土)·

28日(土)消印有効 ※住所/氏名/電話番号/「河童の講演希望」 かの方法で当館までお申込み下さい。定員を超 えた場合は抽選し、2月4日までに当選者へご連

講演会:松岡環

「日本にやってきたインド映画 ~85年の歩みと広がり」

松岡環氏は1983年に日本初のインド映画祭を開 催、以後その紹介に努めてきました。インド映画の 日本語字幕翻訳者にして、アジア全域の映画にも 詳しい松岡環氏のめくるめく語りの世界へ。関連映

日時:2月12日(日)午後2時~3時半 場所:あじびホール(8階)

絵本でインドの民話を聞く会 展示作品の『ふしぎな国の ふしぎ

なミルク』と『サルボクマル』(西岡 直樹・再話、西岡由利子・絵)の原 画を見ながら、当館ボランティアに よる絵本の朗読を開きます。

日時:1月22日(日)、2月19日(日)、 3月4日(日)

※本展チケットが必要です。

期間限定メニュー 「インド・セット」、 ラッシーやチャイ



カフェ&

ショップ

オススメ情報!





インドを集めたコレクターたち India of the collectors



岩立さんは、インド染織コレクター の草分けで、染織の現場を自分の 足で歩いているんだ。いいものを一 瞬で見出す目利きのパワーがもの すごいんだ。そのすごさ、ひと目で 惚れるようなコレクションを君の目 で見たらわかると思うぜ。





Iwatate Hiroko

1960年代以降、毎年インドに足を運びつづける日本の個人 コレクターが蒐集してきた多彩なコレクションを紹介します。イ ンドへの愛情に支えられたコレクターたちの美意識やこだわり によって選び抜かれた絵画、印刷物、染織など、これまで一般公 開されることのなかった秘蔵コレクションを公開します。

加藤さんは、日本製の商標マッチ ラベルコレクターの大将なんだぜ。 6万校ものマッチラベル・コレク ションには、日本の職人がデザイン じたヒンドゥーの神様のマッチラベ ルもある。顔立ちを見てみるよ、ら

| <第2部>) () () () () () (黒田豊コレクション、遠藤健一(美術教師、サイケデリック・レコード・コレクター)、

- 中嶋コレクション、岩立広子(岩立フォークテキスタイルミュージアム)、加藤豊 (燐票家・グラフィックデザイナー)、黒崎卓(開発経済学者、南アジア経済研究者) 関口真理(インド・南アジア研究者)、松岡環(アジア映画研究者)、すぎたカズト (「ナマステ・ボリウッド」主宰)、小磯学(インド文化研究家)・小磯千尋
- (宗教文化研究家)、杉本良男(社会人類学者)、山根聡(ウルドゥー文学研究者)、 福岡正哲(グレンバラ美術館館長)、長谷川時夫(前衛音楽家、ミティラー美術館館長)

Kuroda Yutaka Collection, Endo Kenichi (Art Teacher, Psychedelic Record Collector),

Koiso Chihiro (Researcher, Religion and Culture), Sugimoto Yoshio (Social Anthropologist),

インド・コレクターズ展、改め、『魅せられて、インド。展への道のり。 最終回

いよいよ展覧会スタート! ひみつの展示裏情報~ボリウッドに愛をこめて



表紙のキャラクターは、いったいどなた?「どうも、この展覧会のキャラクター、ガ ネ太郎です、よろしく」。ガネ太郎は、人気の高いヒンドゥーの神様のガネーシャ神 で、描いてくださったのは漫画家のグレゴリ青山さんです。

実は、グレゴリ青山さんは、ボリウッド映画の大ファンでもあります。ボリウッドと は、インドで映画が多く作られる都市ボンベイ(現ムンバイ)とハリウッド映画とを かけた造語で、インド・ボンベイの映画産業のこと。たまたま旅先のネパールで初 めて見たインド映画に出演していた女優マードゥリー・ディークシトに惚れ込んだ グレゴリさんは、以後ボリウッド映画を次々と見続け、ポスター、ポストカードを集 め、CDを買い、DVDも買い、帰国してからは映画雑誌を取り寄せては研究(?)を 重ね、どんどんボリウッド映画の世界にのめり込んでいきました。

本展では、こうして集められたボリウッド映画コレクションと、グレゴリさんの漫 画に発表されたボリウッド映画のダンス・シーンやキラメク女優、俳優たちの原画

を一挙に集め、会期限定の「グレゴリ堂ボリウッ ド本店」を開店します!あわせてインド映画雑誌 『ナマステ・ボリウッド』を主宰する、すぎたカズト さんのボリウッド・グッズを展示し、映画ポスター が貼りつけられたインドの路地裏を再現できな いか、と画策中です。

展覧会会場には、各コレクターのコレクション とそのこだわりの世界がひろがります。コレク ターたちのクレイジーな愛と情熱をお楽しみに!



「グレゴリ党ボリウッド本店」展示プラン Proposed plan for Gregory Aoyama's Bollywood sho

Still fascinated by India - the journey to 'Collecting India

Final report: The exhibition starts! Behind the scenes of the exhibition from Bollywood with love

So you've been wondering about the character gracing this cover of 'Ajibi News'. Let us introduce Ganetaro, mascot for this exhibition. Based on the popular Hindu god, Ganesh, this character was created by Japanese cartoonist Gregory Aoyama.

Aoyama is a great fan of Bollywood films, which the artist first encountered by chance during a trip to Nepal, 'Bollywood' is the neologism that refers to India's film industry, combining the words 'Bombay' (the industry's hub city, since renamed Mumbai) and 'Hollywood'. Becoming smitten with popular Bollywood actress Madhuri Dixit, Aoyama not only watched as many films as possible, but also began collecting posters, postcards, CDs and DVDs, bringing them back to Japan. The artist even had Indian movie magazines sent by mail order, becoming increasingly passionate about the subject.

This exhibition includes Gregory Aoyama's personal collection of memorabilia, along with original images by the artist of Bollywood dance scenes, actresses and actors, displayed inside a temporary shop devoted to the subject of Bollywood.

The exhibition is also plastered with posters and memorabilia provided by Sugeeta Kajuto, head of Bollywood film magazine

Throughout the exhibition, viewers will be able to explore the different interests of the different collectors who have contributed. We hope you enjoy their crazy enthusiasm for India!

Text by Igarashi Rina

Connecting people and places

国家間の摩擦や国内紛争による緊張が今も続く南アジア。 しかしアートの世界では、90年代以降、宗教や民族の違いを 乗り越えてアーティストたちの相互交流が活発化をみせてい ます。その中心的役割を果たしてきたのがアーティスト主体の 非営利団体です。インドの「Khoj」、パキスタンの「Vasl」、バン グラデシュの「Britto」、スリランカの「Theertha」、ネパールの 「Sutra」など、各地で同時多発的に立ち上がったこれらの団 体が主催するレジデンスやワークショップによって、問題意識 の共有と対話の場が生まれ、南アジアのアートが世界から注 目を集める原動力ともなってきました。南アジア特有ともいえ るアート・ネットワーク。本展では貴重な資料や関連アーティ ストによる作品の紹介を通して、その様相に迫ります。

Border disputes and internal conflict remain endemic in South Asia. However, in the art world, exchange activities have flourished since the 1990s among artists who are overcoming religious and ethnic differences. Crucial to their endeavors have been non-profit artist organizations. Several groups, including Khoj in India, Vasl in Pakistan, Britto in Bangladesh, Theertha in Sri Lanka and Sutra in Nepal, have cropped up in this time. Their activities, including workshops and artist-in-residence programs. have prompted a shared understanding of problems and created a platform for discussion, empowering the South Asian art scene and achieving international recognition. Their art network is unique to South Asia. This exhibition draws together valuable archive materials and introduces the work of artists involved.



12月15日(木)~3月27日(火) アジアギャラリーB Thu 15 December - Tue 27 March Asia Gallery B

南アジアの現代美術ー ネットワークから世界へ

Meeting Points— Contemporary Art Networks in South Asia



ニューデリーの「Khoj」国際アーティスト協会 Khoi International Artists' Association, New Delhi.



レジデンス活動



ラッシャと地方でのワークショップ風景 rantiker Prakitajan Workshop in Rajshal by Britto Arts Trust, 2010.

スボード・グプタ(インド)「29の朝」1996年 撮影:四宮佑次 ubodh Gupta (India) "29 Mornings" 1996

○一般200円 高大生150円 中学生以下無料 OAdult ¥200 College & High School ¥150 *Free for Secondary school and under

Ⅰ月2日(月)~4月3日(火) アジアギャラリーA /lon 2 January – Tue 3 April Asia Gallery A -ラキラ☆チカチカ─光のアート Glow! Shine! Flicker!—The Art of Light

眼に焼きつく、光の競演 The play of light on vision

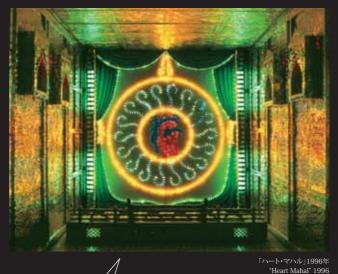
4人のアーティストがパキスタンのデコトラ職人たちの協力を得て完成 させた作品「ハート・マハル」。その意味するところは《心臓の宮殿》。薄暗い 室内に入ると、そこには文字通り電飾に彩られた心臓が怪しく脈打ってい ます。もともとはコンテナー基丸ごと使って展示されたド迫力の作品です。 本展では、この「ハート・マハル」をはじめ、電飾やライトボックスを使った作 品、そして光そのものに着目した作品を紹介します。

With the help of Pakistani artisans, four artists have created this piece, 'Heart Mahal'.

The work translates as 'palace of the heart'. ering the darkened space, the viewer is with none other than an ted heart, beating implausibly. This powerful work was originally displayed inside a shipping container. This exhibition features several other works involving light, lightboxes and other means of illumination.



イユム(韓国)「生きている彫刻」1996年



●様々な人の力を結集して完成!

ドゥリヤ・カジ、デイヴィッド・エルスワース、イフティカール・ダディ、エリザベス・ ダディ、モハメッド・ユソフ一家(装飾)、マイラジ・ニックレワラー一家(板金)、 バッチョ(絵画)、シャウカト・ララ(電飾)

Many people lent their expertise to this project

Durriva Kazi, David Alesworth, Iftikhar Dadi, Elizabeth Dadi, Mohd. vork), Bachoo (painter), Shaukat Lala (electriciar

されのレジデンスロル

Nancy's diary in residential programs

レジデンス・プログラム第11期で9月 から11月まで滞在したベトナムのグ エン・フォン・リンさんと中国のルー・ ヤン/陸揚さん。彼女たちの強力サ ポーターであったナンシーさんが 日々綴った日記から、印象に残る2 人の活動の様子をご紹介します。

During our Residential Programs
Part 2 from September to huong Linh from Vietnam and Lu ang from China to the museum. ere, we feature some of their ctivities as reported in the dian

Chang Yi-Hsuan (Taiwan)

愛称:ナンシー。台湾芸術基金会の助成を受け、9月から11月まで福岡に 滞在。日本・韓国と中国の美術を中心に研究・調査をしながら、2人のアー

ティストの通訳、スケジュール管理など全面的なサポートもお こなった。2人にとって姉のような母のような(ナンシーの方が 年下だけど)存在だった。

9/17

リンさんによるワークショッ プ「想像の風景を創作しよう」 を開催。参加者は朝倉市の高校 生3名。人数は少なかったけど、 その分会話が弾んで、参加者と の距離がぐんと近くなりよかっ Linh is shown third from left.



たから3人日がリンさん

たかも。ワークショップは1枚の大きな紙に参加者が順番に手を加 えながら風景を作りあげるというもの。リンさんは「大切なのは純 粋さ」と、特にルールを設けず、参加者たちも自由に楽しんでいた。

Linh held the workshop 'Create an imaginary landscape', with three high school students participating. The students took it in turns to embellish one large sheet of paper. According to Linh, "Integrity is the most important thing in art", and the students loved her unstructured, no-rules approach to the project.

10/14

子どもが苦手というルー・ヤンさん が、福岡市立有田小学校3年生100 名を対象にワークショップ「LED でア クセサリーを作ろう!」に挑戦! LED 電球をつなげてネックレスを作るとい



うものだったけど、接続がうまくいかず、なかなか電球がつかない子も多く、 悪戦苦闘。大変だったけど、最後はルー・ヤンさんも「"日本の"子どもたち はかわいい」って言っていた。どうやら苦手を克服したみたい!

Despite saying that she wasn't good with kids, Lu Yang held a workshop for 100 elementary school third-graders, 'Making accessories from LEDs'. The aim was to make necklaces out of LED units, Many children had trouble getting their LEDs to connect or light up properly. It was an uphill battle, but in the end even Lu said. "Japanese kids are real

10/25

リンさんが作品で使用する石の 粉を調査するために、朝倉市の採 石場の見学に同行した。ここは山 を丸ごと買い取って採石している 工場。山が石に、石が小石に、小

石が砂に、そして砂がホコリとなる。現場で素材が変化するのを目 の当たりにして、リンさんも何かしらの影響を受けたようだった。

Linh went to Asakura City to inspect a quarry as part of her quest to find stone powder for an art project. The quarry sits on an entire mountainside. The mountain is ground to rocks, the rocks to stones, the stones to sand and the sand to powder. Seeing the raw materials change in form right before her eyes made quite an impression on Linh.



10/31

ルー・ヤンさんのカエル作品の撮影日。死ん だカエルに電気を通して動かす映像作品で、撮 影は一発勝負なんだけど、直前にカエルは死後 3 分程度しか動かないという情報が届き、ルー・ ヤンさんはじめみんなナーバスに。

・ヤンさん(右)とナンシーさん Lu Yang (right) and Nancy

カエルは大学の実験で使われたものを特別に使

わせてもらった。実験室の近くの部屋で待機し、時間と闘いながら、カエル8匹に 電線をつなぎ終え、装置をオン…動いた!

Today we filmed Lu Yang's frog artwork. The work was a video piece in which dead frogs are made to move by electricity, and we had only one chance to get it right. Just before filming we found out that frogs only twitch for up to three minutes after dying, so everyone was nervous.

The frogs had been provided by the experiment lab of a university. We all waited eagerly in the wings, near the experiment lab. Battling against time, the artist managed to hook up eight frogs before connecting the power, The frogs moved!



11/7

リンさんとルー・ヤンさんが、春日 市立春日北中学校にて3年生145名を 対象に「トーク&パネルディスカッショ ン」をおこなった。パネルディスカッ ションのテーマは「自然と科学」。アー ティスト2人と生徒5人がパネリスト となり、ディスカッションが活発に繰 り広げられた。



Linh and Lu Yang held a talk and panel discussion with 145 middle school third-graders. The theme was 'nature and science'. Together with five students, the artists took the role of panelists and much discussion

福岡はとても住みやすい土地でした。リンさんもルー・ヤンさんもいい環境 で制作ができ満足していました。私も2人をサポートしながら、「自分のやり たい事」を考えるいい時間を過ごすことができました。民と官が協力しあうな ど台湾ではあまりない事例など、私が経験していいと感じたことは台湾に持ち 帰り実行したい。そして、今後もアートに携わる仕事をしたいと思いました。

Fukuoka is a fantastic place to stay. Linh and Lu Yang were pleased to have a very good creative environment here as well. I also got to think about ideas for my own future projects here, while helping the two artists. There are lots of differences between Fukuoka and Taiwan, such as the many links between government and people here, which you don't see much of in Taiwan. I'd like to see some of these concepts put in place back home. I finished my time here with the recognition that I definitely want to keep working with art.

リンさんとルー・ヤンさんが滞在制作した作品は次ページにて!



展覧会レポート

第11回アーティスト・イン・ レジテンスの成果展 パート2

Winds of Artist in Residence 2011 Part 2

前ページで登場したグエン・フォン・リンさんとルー・ヤン/ 陸揚さんが滞在中に制作した作品の展覧会が、11月12日 ~27日に開催されました。

The works of Nguyen Phuong Linh and Lu Yang, introduced on the previous page, were shown to the public in an exhibition that ran from 12 - 27 November.



グェン・フォン・リン

Nguyen Phuong Linh 「ホコリ・プロジェクト」、「ストーンスケープ」 "Dust Project" and "Stonescape"



「ホコリ・プロジェクト」では、ホコリを集めた場所のイメージを青焼き印刷し、展示しました

リンさんはここ数年継続している様々な場所からホコリを集める「ホコリ・プロ ジェクト」をここ福岡でもおこないました。「ホコリは長年使われていないことを象 徴するもの。そこに人が存在し、歴史があったということを、ホコリによって私は知 り学ぶのです」。

「ストーンスケープ」は、山で採石をする際の石を砕く発破によって生じた大量 のホコリ(石の粉)を集めて作ったインスタレーション。連なる山々の風景を連想 させます。「誰かが破壊したものを集め、それを別の形へと変化させることで、新た なるものが生まれるということを表現しました」。



「ストーンスケープ

Linh brought to Fukuoka her ongoing project, 'Dust Project', in which she creates work out of fine dirt gathered from different sites. "Dust symbolizes things that haven't been used for a long time. Where there are people, there is history, and I am interested in pursuing this through dust," says the artist.

Her installation piece 'Stonescape' was made from large quantities of the dust generated by

blowing up the stones from a mountain quarry. The piece resembles mountains landscape, "By gathering what someone else has destroyed and turning it into a new form, something new is born, which is what this piece represents."



ルー・ヤン/陸揚

「復活! 水中カエルゾンビバレエ」 "Revived Zombie Frogs **Underwater Ballet**"

ずらりと並んだカエルの脚が、ビートに乗ってピクリピクリと動く。カ エルの腹部を見ると、そこは内部があらわになっていて…「意識のない 状態の動物の動きを制御することに興味をもっている」というルー・ヤ ンさんは、解剖に使われたカエルの死骸の座骨神経に電流を流し、死 後の筋肉反射を利用して、6分間の映像作品を作りました。

実はこの作品は2年前から構想していたものの、専門的な技術が必 要で実現に至っていませんでした。しかし今回、あじびのサポートのも と各分野の技術者の協力を得て、ついに完成! 展覧会のオープニング で、ルー・ヤンさんは満足そうに微笑んでいました。

Lined up in a row, the frogs' legs move to the beat of music. Inside their abdomens we can see an empty space where the bowels would be "I've long been interested in controlling the movements of creatures in a state of unconsciousness," says Lu Yang. The artist sourced the bodies of science-lab frogs and ran electric currents through their sciatic nerves, creating six minutes of film showing the dead frogs' muscular twitches in response.

Lu Yang had the idea for this piece two years ago, but never managed to achieve it due to technical constraints. The work was finally completed here in Fukuoka, with the help of FAAM and various technicians. It was a proud Lu Yang who unveiled her work at the exhibition opening.



レジデンス・プログラム第Ⅲ期



1980年生まれ。バンコク在住。 タイのチュラーロンコーン大学 アートセンターに勤める研究者。

A researcher based at the art center of Chulalongkorn University in Bangkok, Thailand.

滞在:2月20日~3月27日(予定) ned residency: 20 February – 27 March



スプサン・サンワチラピバンさん(タイ) We welcome Suebsang Sangwachirapiban (Thailand).

滞在中の研究テーマは、「異文化受容の文脈に基づく、南 東アジアの現代美術」です。なかでもメディアアートに焦点を おき、あじびの所蔵作品、データベース、資料などをもとに調 査を進めていく予定です。「調査の中で、アジア美術の中にあ る精神性、その明確さや不透明さについて明らかにしたいと 思っています」とスブサンさん。また、障害のある人たちの創 作活動についての調査や、そのほかいくつかの講演会も計画

「日本に来るのは初めてです。できればレジデンスについて の記事を、日本やタイの新聞、雑誌に執筆したいですね。また 友人を作って、様々なことを彼らとともに学び共有したい」と、 とても意欲的。滞在は1カ月半と短めですが、濃密な滞在とな るに違いありません。

"During my stay in Fukuoka. I plan to research Southeast Asian visual art in the context of interculturalism," explains Suebsang. He is particularly interested in new media artworks, which he will study by examining the FAAM archives, databases and other materials. "I'm trying to reveal the spirit of art in ASEAN nations, both its tangible and intangible sides." Suebsang will also conduct work into the creative work of disabled individuals, and will hold various lectures,

"This will be my first time in Japan. If it's possible, I'd like to write about the artist-in-residence program for the Japanese and Thai media. Although I'll be very busy I'd like to make lots of friends, learn, and share all I can," Suebsang enthuses. At one-and-a-half months, the researcher's stay will be short but undoubtedly rewarding.



My Favorite Pieces From the FAAM Collections

各ジャンルで活躍する様々な方に、あじびでお気に入りの作品を 選んでいただくコーナーです。

In this section we ask difference members of the community, including artists and residents, to talk about their favorite artworks at FAAM.

vol. 20



野村正育さん Work selection by

Nomura Masaiku

滋賀県出身、NHKアナウンサー。昨年4月から福岡 放送局に所属、報道番組「熱烈発信!福岡NOW」 (月~金、午後6時10分~7時)のメインキャスター を担当。趣味は野球、フットサルなどのスポーツか ら、美術鑑賞、クラシック音楽鑑賞、鉱物採集、鉄道 ファンと幅広く、好奇心旺盛。小学校の頃から美術 の教科書で絵を見るのが大好きだったという長年 にわたる美術ファンであり、美術館やギャラリーに 足繁く通う。福岡に赴任した半年間で、あじびにも すでに何度も訪問!

NHK福岡放送局「熱烈発信!福岡NOW」 http://www.nhk.or.ip/fukuoka/now/

NHK announcer, born in Shiga Prefecture, Came to NHK's Fukuoka station in April and is main newscaster on the show 'Netsuretsu hasshin Fukuoka NOW' "http://www.nhk.or.jp/fukuoka/now/" Nomura lists baseball, football, art, classical music, minerals and railways among his many and varied interests. His love of art is a lifelong one, beginning as a child with an early fascination for the pictures in art textbooks, and he is a regular visitor at galleries and museums. In the six months since arriving in Fukuoka, Nomura has also visited FAAM

明治以降、海外に輸出された人力車。バングラデ

シュでは今も街中で活躍しています。日本の人力車は 地味な印象ですが、昔は蒔絵が描かれた華やかなも のもあったそうです。とはいえ、このカラフルさはバン グラデシュならではでしょう! あじび所蔵の3台のリキ シャのうち、この作品は福岡で制作されたもの。見慣 れた風景が描かれているのはそのためです。予習の 上、候補作品を絞り込んで来てくださった野村さん、そ の誠実なお人柄に感動しました。

Since the Meiii era, iinrikisha have gone to many countries abroad. They are still used in Bangladesh. While many people imagine Japanese jinrikisha to have been dull in appearance, they used to be illustrated with bright artwork - even if not as colorful as this incredible piece from Bangladesh. Of the three rickshaws we hold in the FAAM archives, this one was manufactured in Fukuoka. It even has scenes familiar in Fukuoka. I'm also very impressed that Mr Nomura took the time to visit the museum before this interview, to get a shortlist of works to discuss. (Yamaki)

圧倒的な装飾パワー!見ているだけで元気がもらえそう

の文明が別の国で独自の発展を遂げ、日本では到底ありえない装飾が施されるようになったの

A decoration sensation! Just looking at this lifts my spirits.

This is one powerful piece. Not just the awning but also the saddle, frame and even mudguards are plastered with artwork, as if in fear of having any blank spaces. It's very impressive. I've heard that the origins of the rickshaw lie in the 'jinrikisha' of Japan. It's interesting to see how a Japanese invention has gone abroad and taken on a life of its own, with these vibrant decorations you would never see vibrancy all of its own. Especially with these colorful things running around the place! (laughs). Looking at it lifts my spirits. It's a wonderfully playful work.



リン・ピンチュン(ピンキー)

林品君(台湾)

Lin 'Pinky' Pin-chun

あじびでのレジデンスを終えて **Residency at FAAM ends**

台湾芸術基金会の助成を受け、9月から11月の約3カ月間あじび に滞在したピンキーさん。2年前も滞在し、その時は主に「第4回福 岡トリエンナーレ(FT4)」のサポートをおこないました。「FT4を経 験し、私も自身の写真プロジェクト『風景好』に本気で取り組みたい と思い、会社を辞めました」。そして今回は、アートスペースの企画運 営や九州の芸術活動についての調査研究のために再び福岡にやっ てきたのです。「台湾に比べて福岡は個人で運営する小規模スペー スが数多くあり、彼らがアートと関わる中でどう生き抜いているかを 知りたいと思いました。実際に話を聞いたり活動を目の当たりにし、 彼らから勇気をもらいました」。帰国後、自分たちの展示スペースを 設立することを決めたと言います。「私に2度も転換期を与えてくれ た福岡。今回の滞在で、さらに私にとって特別な場所になりました」。

Pinky was a resident researcher at FAAM from September to November on a scholarship from the Contemporary Art Foundation Taiwan. She had stayed in Fukuoka two years earlier, when she helped during the 4th Fukuoka Asian Art Triennale (FT4). "After being part of FT4, I really wanted to achieve my own photographic project, 'What a View', so I then quit my job to do that." Her residency in 2011 was to study art space administration and research the cultural activities of Kyushu. "Compared with Taiwan, Fukuoka has a lot of small, independently run art spaces. I wanted to see how the operators of these spaces combined their business survival with their involvement in art. It's been very inspiring to talk with these art space operators and see what they're doing," Pinky explains. Since returning to Taiwan, Pinky says she has decided to open her own independent art space. "Twice, Fukuoka has helped bring about a personal change for me. With this residency, the city has become even me

AlibiNews